

# 研究所だより

発行 2014年7月31日

 明治学院大学  
 社会学部附属研究所
〒108-8636 東京都港区白金台1-2-37  
TEL (03)5421-5204~5

所長 清水 浩一

## No.28

### 社会学部附属研 究所所長になっ て考えたこと

所長 清水 浩一

では、実に95・2%が再稼働反対や原発の廃炉を求めているという。朝日新聞社が経産省に情報公開を求めてようやく明らかになったという。この事例では、調査（研究）の結果は政治的な思惑でどうにでもなるということを示している。

二つ目は最近の介護保険改正方針に関わることである。これまでの「要支援」サービスを市町村事業に移し、市町村はその担い手を市民のボランティアやNPO等に期待せよというものである。今後は住民がサービス水準に不満を持つなら自分たちで反省し、あるいは市町村に文句を言え、ということか。こうして介護保険料は全員から強制的に徴収するシステムは変えずに給付を極限まで狭め、その不足分を家族や地域に期待する。いわば深刻化する福祉ニーズに背を向けながら制度の持続可能性を追及。超高齢社会の到来を

考えれば致し方ない面があることは承知しているが、保険料と給付の対応関係といった次元で考えると国家的「詐欺」と呼べるかもしれない。

二つの事例はいずれも民主主義の根幹に関わる問題である。民意を無視して（誰かの利害）を擁護して強引に突っ走っているように見える。安倍政権は民主主義という点から見ると、憲

法解釈変更の例を持ち出すまでもなく、戦後政治の最大の危機かも知れない。加えて前者は、政策決定に関わる国民の意見集約（パブリックコメント）を民主主義の手続きを踏んでいるように見せかけつつ、その結果が都合であった場合には内容は無視して初期の政策を押し進めている。品格を疑う政治手法である。ここからわれわれは学問や調査研究の中立性がいつも揺らいでいることを確認し、自覚的であることが必要と思う。

後者は、介護保険や福祉に頼るしかない圧倒的多数の（低所得）高齢者は、「税と社会保障の一体改革」という政治的スローガンにある種の幻想を抱き、消費税導入を容認してきたと思われる。民主主義↓衆選政治↓国家的「詐欺」といった因果連関をどこかで断ち切りたいと考えるのだが…。

### 研究所各部門から

#### 調査・研究部門

新年度、社会学部附属研究所は所長はじめ、所員各位の顔ぶれが入れ替わって諸事一新、私も調査・研究部門の主任という役割を仰せつかって、遅

本年の4月1日から研究所所長に任命された。こうした役職はほぼ着任順に動かししていくという明治学院大学の民主主義の、「伝統」の結果であり、私の能力への評価からではない。研究所の懸案事項といった重い内容の引継ぎも特になかった。過去そうした問題がなかったわけではないが、歴代の研究所所長や事務局所員の努力によって克服され、現在は極めて安泰だ。所長の役割はこれまでの研究所内の慣例を尊重し、2年の任期期間中の研究所業務や機能・役割をスムーズに進行させること、と認識している。

さて政治と学問の関係について、最近、腑に落ちないことが続くので、民主主義の観点から一言述べたい。

一つはつい先日の5月25日に朝日新聞が報じていたことである。安倍内閣は先月に閣議決定した「エネルギー基本計画」で原発を「重要なベースロード電源」と位置づけた。その際、国民に意見を聞く「パブリックコメント」

ればせながら思いを新たにいたしました。改めて研究所だよりにて、ご挨拶申し上げます。今年度から始まった特別推進プロジェクト「東日本大震災をめぐる諸問題」も、すでに被災地での研究をすすめておられる先生方の参加を得て、まずは恙無く発足することができ、これからの調査研究に期待するところ大というべきでありましょう。私自身も、昨年から福島県、岩手県など、被災地を訪れてこの激甚災害の復興を図るこれからの課題について、取り組むべき研究を構想しております。しかし、社会学という視点からだけでなく、あまりにも多くの課題が山積しており、しかも、広範にわたる被災地が抱える現状は、それぞれ質的に異なっており、まことに研究者としての力量が問われる大きな宿題を抱えていると思う今日この頃です。

明治学院大学社会学部付属研究所は、これまで数多くの現代的な社会問題に取り組み、そのスタッフのたゆみない努力をもって、その研究成果を世に問う活動に邁進してきたと自負するものではあります。今回の未曾有の大震災・津波・原発事故のもたらした社会的影響はあまりにも大きく、社会科学という学問、それを担う大学の研究・教育活動の真価が問われる事態

は、これからの正念場といっても過言ではないと考えるものです。一方で、時間の経過とともに、あのような過酷な災害の記憶すら日々忘れ去られ、何事もなかったかのような日常が戻りつつあるのも確かです。家が流され、親しい人が死んだという事実も、今を生きる人間の思考の中では、いやなこと早く忘れ、なかったことにしてしまう方が楽だ、という作用が働くこともやむをえないかもしれません。

しかし、社会科学の営みは、現実に取り組みを冷静に、眼を逸らさず粘り強く把握し、思考し、分析することとを仕事とする以外に、意味のあることではないといふべきでしょう。このプロジェクトがどこまでできるかは予想できませんが、少しでも被災地の役に立てる成果をあげることができるよう、2年間努力したいと思っております。

(調査・研究部門主任 水谷史男)

## 相談・研究部門

1999年に明治学院大学に着任し、3年目に相談・研究部門主任を、そして今年度、再び同じ職務を担うこととなりました。その間も、部長としてのかかわりは何度かありましたが、年々発展していく活動内容に驚きます。前回主任時代の当部門における改

革は、相談活動を個人から地域へ、積極的に地域に出かけていく相談活動へ移行する始まりだったと記憶しています。村上雅昭先生が当部門で3年間に渡って育ててこられた地域密着型で精神障害者を包括的に支援していく多職種チームによる「みなとネット21」がNPO法人として巣立っていかれたのもこの頃でした。

そして、今年、港区及び区内子育てグループの方たちと学生ボランティアとで取り組む「地域子育て支援事業」が8年目を迎えるようです。ぴあグループが確実に力をつけて活動を続ける団体となり、更にはチャレンジコミュニティ大学の受講生やOBの団体とのコラボレーションを進めるなど、異世代や多様な活動を続ける団体との

交流も生まれ始めています。これも当部門による継続の力と、地域との連携力だといえるでしょう。これまでの活動を大事に守りつつ、新たな役割を創れるように、「わたしにできる一歩」から進めていきたいと考えています。

私事ですが、昨年、特別研究休暇をいただき、あちこちの福祉実践活動現場の見学や研修を受けるチャンスを得ただけでした。着実に実績を上げていく現場にはスーパーバイザーが居て、定期的なスーパービジョンが行われていました。このような現場は福祉領域では多くありません。当部門が最も大事にしている「実践家のための臨床理論・技術研修」では、実践活動の振り返りを促す知識の習得やワークショップが用意されています。昨年度は、明治学院大学を卒業された若手の



第27回 社会福祉実践家のための臨床理論・技術研修会の様子①



第27回 社会福祉実践家のための臨床理論・技術研修会の様子②

実践家を中心に実施されたと伺っています。原点に立ち返って考え直すことを軸に、私にとっても「原点回帰」となって、新しい知識や技術の修得を楽しみたいと思います。

地域力が育つと、人と人が言葉を交わすようになり地域全体がやさしくなります。新しい出会い、発見の場が部門で生まれるよう、チャレンジコミュニティ大学の受講生やOBを含む地域住民や在勤者、他学部教員や学生たちと、共に学び合い、支援し合う関係作りを目指したいと思います。

どうぞよろしくお願いたします。

(相談・研究部門主任 八木原律子)

## 学内学会部門

本年度、学内学会部門の主任となりました社会学科の渡辺です。どうぞよろしくお願いたします。

明治学院大学社会学会（1954年創設）、社会学部友の会（1979年創設）をへて、1992年に教員、卒業生、在学生から構成される明治学院大学社会学・社会福祉学会（通称学内学会）となりました。記憶をひもとくと、友の会時代までは卒業生と教員との間の交流が主体でしたが、学内学会になってからは、学生部会が設置され、在学生がこの活動に加わり、その

活躍が目立ちます。

学内学会の役をするのは初めてですが、これまで総会や研究発表会に出席させていだいて感じたのは、年月をへるにつれ、学生委員の活動がしつかりとし、積極的に関与しているものになってきているということです。学内学会の活動で、学生たちは就職活動での振舞いや社会人になってから役にたつ態度を学習しているなど感じています。

卒業生部会は、今年度から委員長・役員が交代し、年齢的にも若返りが図られました。これまで卒業生部会を担っていたただいた方々に感謝するとともに、新たな展開があることを期待しています。

学内学会では、会報と機関誌『Socialy』を発行しています。6月には総会・特別講演会（松原康雄先生）・懇親会、11月に研究発表会が行われます。なお、2015年3月には社会学部と卒業生部会共催で、長年にわたって明治学院大学に貢献してくださった松井清先生の退職に際して「春の講演会」及び懇親会が行われる予定です。学生部会では、スポーツ大会、映画上映会、2年生を対象としたゼミ選択応援企画の社会学科ゼミサロン、社会福祉学会1年生へのコースガイドン

ス、学生部会合宿、福祉学科卒業生と在学生の交流会など、さまざまな学生部会立案による活動が行われています。

また、学内学会の一大イベントである研究発表会では、2013年度の場合、ゼミ参加8件、個人参加9件（学部生4件、大学院生4件、卒業生1件）の計17件の報告がなされ、117人の参加者がありました。ここにも学生部会委員が運営に携わっています。

2013年度の『Socialy』では、特集として学生にとって切実な「就職活動と大学」をテーマとしています。テーマは編集委員が決め、学生部会の学内学会委員がアンケート調査を行っています。このほか、卒業生へのインタビュー、ゼミ紹介など、論文のほか、さまざまな企画に学生部会委員がかかわっていることに特徴があります。

来年度は社会学部創立50周年にあたり、学内学会も社会学部との共催で、50周年記念の行事や『Socialy』の特集などで協力することになります。教員と卒業生部会、学生部会との共働によって、よりよきものができるように努力したいと思います。

(学内学会部門主任 渡辺雅子)

## 市民講座報告・研修会案内

当所相談研究部門はこれまで、子育て

て／子育て環境向上のため、地域内の多様な人々との対話の場づくりを実践してきました。その延長線上に見えた課題は、子育て家庭に限らない社会的孤立です。現在その予防のための実践



2013年度 港区地域こぞって子育て懇談会の様子



2013年度 市民講座の様子

**第28回社会福祉実践家のための臨床理論・技術研修会**  
**総合テーマ「ソーシャルワークの実践力を育てる」**

日時：2014年10月18日(土) 10:00~15:30  
 会場：明治学院大学白金キャンパス

●**基調講演 (10:00~12:00)**

「いきいきとゆたかな実践を続けるために  
 —ソーシャルワーカーのためのメンタルヘルス基礎講座—」  
 講師：代々木病院 精神科医 天笠崇

●**ワークショップ (13:00~15:30)**

**ワークショップA**

「自分を育てる」 \*初任者(実践経験1年以内)対象  
 コーディネーター：新保美香(明治学院大学教授)

**ワークショップB**

「チーム(職場)を育てる」  
 コーディネーター：八木原律子(明治学院大学教授)

**ワークショップC**

「地域を育てる」  
 講師：コミュニティ・オーガナイズング・  
 ジャパン理事 小田川華子  
 コーディネーター：榎原美樹(明治学院大学専任講師)

●**卒業生との懇親会 (16:00~17:00)**

**連絡先**

明治学院大学社会学部付属研究所  
 〒108-8636 港区白金台1-2-37  
 Eメール issw@soc.meijigakuin.ac.jp  
 TEL03-5421-5204・5205 FAX03-5421-5205

を模索するに至っています。2013年度は、地域という現場で、社会的孤立問題に立ち向かう様々な市民や専門職の取り組みに注目する市民講座「社会的孤立問題を考える」を注目！地域のつながりを取りもつ人たち」を開催しました。分野を超えた5組の実践活動を紹介します、市民としてできることを考える機会としました。

定例となった「港区地域こぞってネットワーク会議」は6月、「港区地域こぞって子育て懇談会」は1月に開催しました。前者は58名、後者は146名の参加を得ました。後者の懇談会は、6つの井戸端会議(分科会)とし

て、「多世代・地域・つながり」子ども時代を遊びきる」「ゲーム・スマホetc.のトラブル急増中！どうする？親は？子どもは？」現役中高生といっしょに考えよう！」「家族が増えようとどう変わる？ママ・パパの期待と不安」家族が楽しく生きるには」「どの子も過ごしやすい地域づくり」子どもの発達の問題に視点をおいて」「大学生の放課GO!!」地域の子育て、大学生にできることと」「子育て・家庭・地域etc.なうんでもしゃべり場」を開催しました(報告書ご希望の方は社会学部付属研究所までご連絡ください)。懇談会を契機に、

常設プレーパーク(冒険遊び場)づくりをめざす活動や、発達のでこぼこを受け入れ、支え、見守る地域のネットワークづくりをめざす活動が生まれました。2013年度は、11月と3月に地域活動に役立つファシリテーション講座も開催し、生まれた活動の応援と共に、新たな活動者間のネットワーク発展にも寄与しました。

**二〇一四年度  
社会学部付属研究所  
プロジェクトの紹介**

★**一般プロジェクト**

☆現代市民社会形成過程における成人教育機関の役割

—デンマーク通学制国民高等学校の事例研究— (代表 坂口 緑)

☆小児慢性特定疾患患者及びその家族に関するライフコース分析

—その生活実態と社会福祉ニーズに関する考察— (代表 茨木 尚子)

☆山形県におけるひとり暮らし高齢者の生活と親族・地域ネットワーク

(代表 河合 克義)

☆子ども社会学のニューウェーブの紹介と検討 (代表 元森絵里子)

☆ステップファミリー・セミナー企画 (代表 野沢 慎司)

☆戦間期の北西太平洋世界に関する歴

史社会学的基礎研究

(代表 石原 俊)

☆知的障害のある人の「精神的課題」と社会福祉サービス機能研究

(代表 中野 敏子)

☆災害にレジリエントな地域開発に向けた研究 (代表 明石留美子)

★**特別推進プロジェクト**  
 東日本大震災をめぐる諸問題

**二〇一四年度  
社会学部付属研究所  
スタッフの紹介**

所長

清水 浩一

調査・研究部門主任

水谷 史男

相談・研究部門主任

八木原律子

学内学会部門主任

渡辺 雅子

所員

岡 伸一

〃

榎原 美樹

〃

新保 美香

〃

柘植あづみ

〃

藤川 賢

〃

松井 清

〃

松原 康雄

〃

吉田 優貴

研究調査員(調査・研究部門)

濱田智恵美

ソーシャルワーカー(相談・研究部門)

平野 幸子

副手

坪井 栄子

教学補佐

佐々木敬子

学内学会部門事務担当